

<櫻田會通信>

ポーランド便り④:「ポーランドと東中欧諸国の地政学的変化について」

大東文化大学法学部
政治学科教授
武田 知己

前稿でも述べたように、ウクライナ戦争をめぐる西側の団結力を背中で受け止め、ウクライナ支援に真っ正面から挑み続けたポーランドは、2023 年を通じて、西側の「前線国家」(frontline state)と言われてきた。あるいは「ヨーロッパの重心」(center of gravity)はポーランドにあるという言い方もなされてきた。前線国家という言い方に倣えば、「重心国家」とでも訳すべきであろうか。2023 年 10 月に開催されたワルシャワ安全保障フォーラム (Warsaw Security Forum)でも幾度もこうした言葉が飛び交った。

私がポーランドに来ようと思った理由の一つも、かつては社会主義国であり、西側優位のヨーロッパ政治の中で東側に位置していたポーランドが、西側の前線やヨーロッパの重心となるという地政学的な変化を見聞したいということにあった。こちらでいろいろと考えているうちに、なるほど、ポーランドは2022年2月になって急にクローズアップされた国ではなさそうだということが分かってきた。ポーランドの地政学的な重要性は、冷戦崩壊後に東中欧諸国が注目を浴びてきた歴史の延長線上にあり、また2022年に先立つアメリカの対イラン、対ロシア戦略がその前史といえる。つまり、ポーランドが何故21世紀の国際政治で重要なのかを理解するには、少々ポーランドの歴史を知らなければならないという訳である。



ポーランドはある一定の年齢以上の日本人には一般に「東欧諸国」(東ヨーロッパ)の一つと認識されているだろう。ただ、狭義では東ヨーロッパとはウクライナ・ベラルーシ・ジョージアなどを指す場合もあり、現在は「中欧諸国」(中央ヨーロッパ)という言い方が次第に普及してきている。手元にある『ヨーロッパのデモクラシー』という大学の教科書では、ポーランド、チェコ、スロヴァキア、ハンガリー、スロヴェニア、クロアチアがこれら「中欧」の国に含まれている。ルーマニアやブルガリアは別扱いであるが、他の本では「中東欧諸国」(英語表記: Central Eastern Europe. 以下 CEE とも)という呼称で、これらすべての国々を扱っている(『教養としてのヨーロッパ政治』)。この中東欧と言う言い方、CEE という呼称も、かなり一般化しているといえよう(以下では東中欧で統一)。

ただ、いずれにせよ、私のような標準的な日本人には単にヨーロッパの地理的關係を意味する言葉のようにしか見えないが、実は地理的な概念はしばしば強い政治性を持つ。東中欧諸国という言葉も例外ではない。たとえば、前述のワルシャワ安全保障フォーラムのレポートにはこう書かれている。

この報告書では、東中欧諸国を、NATO の東側面の国々を主として意味する(ブルガリア、チェコ、エストニア、ハンガリー、ラトヴィア、リトアニア、ポーランド、ルーマニア、スロヴァキア——いわゆるブカレスト・ナインである)。然しながら、ウクライナやモルドヴァ、そしてベラルーシのような国々も、東中欧諸国の特徴を備えており、西側の諸機構への加入の機会を待っている。彼らの期待とその努力——ウクライナがその典型であるが——は、以下この報告書で論じる主張の鍵となる要素である(“Central and Eastern Europe (CEE) as a New Centre of Gravity”, Annual Report 2023 序文より)。

※ブカレスト・ナイン——1999 年に北大西洋条約機構に参加したポーランドなど 3 か国、2004 年に参加したバルト三国など 6 か国が 2009 年に結成した NATO 結局強化のための枠組み

ウクライナやモルドヴァ、ベラルーシまで、この地域に抱合しようというのである。まさに、東中欧を戦略的にとらえて余すところがない。

さて、ヨーロッパの歴史は、ある意味、地理区分とともに国境とその変遷の歴史であるといえる。まず、ヨーロッパを「西」と「東」とに別つ発想は、17 世紀の啓蒙時代に確立している。そして、東側は文明国たる西側に対する野蛮国が位置する場所とされた。つまり、Borderlands(辺境国家)という含意が「東」という地理概念にはある。東と言う言い方に侮蔑の意味があるのはそういう含意からである。

他方で、それに対する In-betweenness(狭間地域)という概念もこの東中欧諸国という地域概念は持っている。神聖ローマ帝国が「ドイツ」の東側を境界とする一方で、ビザンチン帝国の境界がそれと交わろうとする地域、すなわちドイツ的なものとスラブ的なものとが交わる「狭間」が東中欧の特徴だとする議論である。

ポーランドという殆ど平地で構成されている国は、以上のようなニュアンスを異にする西と東の境界が引かれ、狭間に位置する地域に位置すると考えられるが、12 月のシンポジウムでベラルーシの研究者タチアナ・シュヒトソバ(Tatiana Shchytsova)は、西側の影響も受けず、ロシアの文化にも完全には染まらないものとしてベラルーシをとらえてみせた。ポーランドよりも東側に、そうした境界が存在するという感覚である。東中欧諸国は、多かれ少なかれ、こうした複雑な境界は自国にあるという意識を有しているようである。

こうした感覚を、例えば、チェコ出身のミラン・クンデラ(ちなみに、クンデラは 2023 年 7 月 11 日に 94 歳で亡くなり、こちらでも大きな話題になった)は、以下のように描いた。

地理的な意味におけるヨーロッパ(大西洋からウラル山脈におよぶ地域)は、常に二分され、それぞれが独自に発展してきた。その一方が古代ローマとカトリック教会に結びついていたとするなら(その特徴はラテン文字の使用である)、他方はビザンティウムとギリシア正教を拠り所としていた(その特徴はキリル文字の使用である)。ところが 1945 年を境に、このふたつのヨーロッパの境界線は数百キロ西側に移動し、自分を常に西欧人とみなしていた幾つかの民族は、ある日、目を覚ますと、自分たちが東側にいることに気付いたのである。その結果、ヨーロッパには、戦後、三つの根本的な状況が形づくられた。すなわち西ヨーロッパと東ヨーロッパの状況、そして地理的に中央部にありながら文化的には西、政治的には東に位置する、もっとも複雑なヨーロッパの地域の状況である(ミラン・クンデラ「誘拐された西欧——あるいは中央ヨーロッパの悲劇」)。

共産主義に「奪われた西側」としての中東欧と言う位置づけであるが、滞在中にインタビューに応じてくれたウクライナの専門家グジェゴシュ・モティカ(Grzegorz Motyka)教授も、「ポーランドはもともと西側です」と筆者に強調した。特にポーランドでは、1989 年 9 月の民主化は、解放の時であっても変身の時ではなく、むしろ復帰の時であったという感覚が、特に 50 代以上には大変強い気がする。

ところで、日本語ではクンデラの考えを含め、西と東の間にもう一つのヨーロッパを想定する際、それを「中欧」構想と言ってしまうが、隣国ドイツには伝統的に Mitteleuropa と呼ばれる概念が存在する。それは、フリードリヒ・ナウマンが主張したプロシアによる帝国主義的支配圏構想(1915 年)として知られている。クンデラの「中欧」概念はこれとも大いに異なっている。そのほかにも——現在のドイツとオーストリアを含め——いわゆる「中欧」と銘打った地域構想には様々なヴァリエーションが存在するのである。ヨーロッパは実に複雑な地理概念を有するという他ない。

こうしたことを知る中で、私は、ポーランドあるいは東中欧が「辺境」である言う概念よりも、「狭間」にあるという感覚に、より興味を持つようになった。そして、自分なりに中東欧諸国のこの独特の地政学的感覚を掴みたいと思うようになった。

そこで、夏休みを利用して、中東欧、バルト三国のいくつかを旅行することとした。とりあえず、バルト三国を車で北上し、そして南下





し、時期をずらしてチェコ、スロヴァキアを経てハンガリー、そしてオーストリア、ドイツを列車で移動した。その先々で、博物館、歴史館をなるべく多くみるようにした。残念なのは、旧ユーゴスラビア、ブルガリア、ルーマニアに行けなかったことである。8月上旬のスロヴェニアでの洪水のため、車での移動を断念したことが一つの理由であった(写真は筆者が2023年夏に集めた各地の博物館のガイドブック)。

不十分ではあったが、こうして各地の歴史博物館、また各地に残された強制収容所、政治刑務所、KGB博物館などを見物し、近現代史を大急ぎで学んだことを踏まえると、この地域に共通していることは二つあった。一つは、この地域がドイツとロシアに交互に支配された地域であることであり、もう一つは比較的遠いドイツによる支配は許しても、比較的に近い

ソ連型の共産主義支配は許していないことである(この地域の自由化はポーランドに続く1990年前後であって、それからまだ半世紀もたっていない)。

もちろん、それぞれの国には違いもある。例えば、ソ連に支配されたバルト三国は、ポーランドやハンガリーよりも、苛烈な支配を受けたという印象を持つ。「グヤーシュ共産主義」という言葉があるように、ハンガリーやポーランドはよりやわらかい支配体制であったと教科書にも書いてある。また、マイダネック、トレ布林カ、アウシュビッツ=ビルケナウなどナチスドイツの設置した絶滅収容所を見たり、学んだりすると、ナチスドイツもソ連の支配もどちらも非人間的であったことは理解できるが、同時にドイツはより近代的=合理的であり、ロシアはより反近代的=野蛮であったかもしれないとも感じられる。

“Re-writing Cultural Geography”においても、アーレントの議論を紹介して、そのような発言が支持されていた。ただ、どちらの政治体制も集産主義(collectivism)という共通した社会的性格を有している。これは、個人の創意工夫や自発性を集団性の中に吸収して、中央あるいはナチスあるいはソビエトの支配に従属させてしまうシステムであり、その経験



があるが故に、例えばナチスから共産主義へ比較的スムーズに移行した国もあった(例としてハンガリーなど)一方で、1939年9月1日のドイツ侵攻の16日後に密約によってソ連にも挟撃されたポーランドは、その両者に強い反発を抱くに至った。例えば、ワルシャワ蜂起

(1944年8月1日 - 1944年10月2日)が失敗に終わったのは赤軍の支援をあてにした愚かさであった、と滞在中に二度訪問したワルシャワ蜂起博物館でガイドが二度とも強調していたのが強く印象に残っている。東中欧諸国の共通性と多様性はほかにももちろんあるが、おおよそ以上のような点に強く印象付けられた(上の写真は Riga の KGB 博物館、2023 年 8 月 27 日筆者撮影、下の写真はマイダネック強制収容所、2023 年 6 月 20 日著者撮影)。

秋以降、こうした従来型の「東中欧」概念を踏まえつつ、それを越えるような地域構想にいくつか出会ったのも忘れられない。

第一のそれは、既に述べた 10 月のワルシャワ安全保障フォーラムのシンポジウムおよびレポートが示したように、世界をカール・シュミットのように「友と敵」と二元論的に分割して考え、自陣を団結させる過程で、そもそも西側であった東中欧を西側に回収してしまおうという考え方である。同じような考えは、12 月にあったシンポジウムでも一部の論者が繰り返していた。

クンデラが言うことが正しければ、そもそも西側であったこの地域が冷戦後に西側に吸収されるのは自然であるかもしれない。そうなると、東中欧はヨーロッパの周辺ではなく狭間でもなくなり、「前線」となるというわけである。

だが、こうした構想が、ややもすれば、ロシアへの対抗という強い政治性をもった少しく乱暴な構想の基礎とされてしまう可能性もあることは否定できない。この考えが、軍事的合理性と結びつけば、その可能性は高まるであろう。事実、ポーランドではそのような方向に事態が進行しているように思われる。

例えば、2007 年前後から、アメリカは、対ロシア向けの MD 配備計画においてチェコと並んでポーランドへの配備に拘っていた。脅威の対象はイランとされたが、このころからアメリカは、前線基地をポーランドに置きたかったのである。ロシアの反発は当然激しかったが、当時のレフ・カチンスキー大統領は全くひるまず 2008 年春からの基地建設着工を前提に受け入れを進める。それが自国の対ロシア防衛力を高めることは明らかだったからである。2010 年 4 月 10 日、「カティンの森事件 70 周年追悼式典」へ出席予定であったカチンスキー大統領とマリア夫人を乗せた政府専用機 TU-154M が、ワルシャワからスモレンスクへ向け離陸し、墜落した事件(スモレンスクの悲劇)が、ロシアの陰謀だという説が消えないのはこうした事情がある。

しかし、2008 年 11 月の大統領選を控えるアメリカは、ロシアだけではなく、NATO からの反発もあり、ロシアとの協議の仕切り直しを模索し始める。実際に、ブッシュに替わって大統領に就任したオバマは、2009 年 10 月、東欧への MD 配備計画を中止した。

また、ポーランドには、アメリカ偏重外交(大西洋主義)に対するヨーロッパ重視の力も働いている。2007 年 10 月の上下院選挙で、市民プラットフォームが勝利し、ドナルド・トゥスクが首相に就任していた。トゥスクは、前政権の反口強硬姿勢・アメリカ偏重姿勢を改め、ロシアとの協議、ヨーロッパ重視の姿勢を示した。トゥスクは、ロシアとの協議、アメリカとの協議の中で、アメリカが強行する MD 施設受け入れの見返りを求めるとして、2008 年 8 月に自国の自衛

力を高めるパトリオットミサイルの配備を条件に受け入れに合意する。結局、この合意は前述のオバマの方針転換で反故にされてしまうのだが、西側の一員といっても、そこには無視できないニュアンスの差、すなわち、アメリカ重視＝軍事重視かヨーロッパ重視＝対話重視かという相違がある。

しかし、2023年3月、アメリカ陸軍第5軍団(米本土ケンタッキー州のフォート・ノックス)の前方展開司令部キャンプ・コシチュシユコが、ポーランドの主要都市ポズナンに設置され、開設記念式典が行われたように、日本同様、ポーランドは米軍を常駐させる国となっている。その背景には、2008年のジョージア侵攻、2014年のクリミア併合、2022年のウクライナ戦争といういくつかの契機が絡み合っている。自らの意思を押し付けがちなアメリカへの不信感、ヨーロッパへの親近感よりも、カチンスキー大統領が言ったように、ポーランドが「西欧とロシアとの間の危険な灰色地帯に取り残される」という不安感の方が勝ったというべきであろう(「日本経済新聞」2009年10月13日付)。この地域を西側が取り戻すことは、ポーランド国民からの強い支持を毎がいなく受けている。

他方で、もう一つの考え方は、やや理念的でユートピア的なものである。ミラン・クンデラがその一人だろう。クンデラは、実は、西側で失われたもの、西側とも、ロシアとも異なる価値がこの地域にあるとも考えていた。言い換えれば、ヨーロッパにとって、東中欧を取り戻すことは、ヨーロッパを取り戻すことでもある、というのであった。

12月のシンポジウムで、登壇した Borderland Foundation の創設者クシストフ・チセフスキ(Krzysztof Czyżewski)もそのような考えの継承者である。しかし、興味深いのは、彼は東中欧諸国を称して「小さき者」と呼び、「小さき者たちの価値」(Value of the small)が支配的なイデオロギーや文化に対抗できることを力説して、会場に強い感銘を与えたことであり、このような考えの中心にポーランドを置いたことである。チセフスキの発言を受けて、リトアニアからのある研究者は「西欧にとってのフランスが東中欧にとってのポーランドであるべきだ」とまで言っていた。「ポーランドでやっている国際会議だから、これはお世辞です」といって会場を笑わせていたが、冗談とばかりは言えない。「リトアニアにとってみれば、ポーランドはヨーロッパやスラブの文化に出会う場でした」という彼女の発言は、確かに歴史的に裏付けることも可能だからである。

ポーランドは「小さき者たち」の代表であり、東中欧の文化交流の中心であるとする位置づけは、2013年に提示された小森田秋夫の中国(ちゅうこく)概念にもみられる。但し、小森田は、ポーランドがフランスのようになるべきだとは思っていない。あくまでヴィシエグラード諸国などを率いて、「小さき者たち」の価値を代表すればよい、とする。そう考えると、この「中国(ちゅうこく)」概念は、クンデラよりもより控えめで、理念的であるといよりは実際的と言えるかもしれない。こうしたニュアンスの違いがあるが、この東中欧諸国連帯構想は、隣の大国が19世紀の帝国の思想を復活させ、この地域からロシアと欧州の双方と結びついているという狭間感覚のオプションを奪い、帝国に属することが文明国の証であるとするかのような態度をとっている現在、有効性を発揮するかもしれない。

※ヴィシエグラーヴ諸国—1991年ハンガリーの都市ヴィシエグラーヴの首脳会議で結成されたグループ。ポーランド・ハンガリー・チェコ・スロヴァキアの四か国で結成。V4などとも表記される。

この構想において重要なのは、ポーランドが果たすことのできるかもしれないリーダーシップである。重要なことの一つは、ポーランドがその多様性を駆使して、幅広く「架け橋」の可能性を生むことである。人種の多様性、文化の多様性、政治的な経験からいって、ポーランドは確かに東中欧のいくつもの経験が積み重なった場所である。かつてポーランド自身が帝国であったことを考えれば、その幅はかなり広くなる。東中欧の小国諸民族の交流の場としてのポーランドから、新しい文化が構想されることを望むには、なるべく幅広いブリッジを作ることが必要である(チセフスキの発言より)。とすれば、ポーランドは、その豊かな歴史と常に真摯に向き合い、アイデンティティの深みを増す努力をすべきである。歴史を学ぶことがそのまま政治の実践に結びつくのである。

しかし、それは、ポーランドが強い近代国家であることを否定する発想に連なるかもしれない。それはポーランドが有している NATO あるいはアメリカの軍事力との強い結びつきと矛盾するかもしれない。しかし、「力」が背景になければ、架け橋として政治力・文化力を生むこともできない。自国防衛、西側への防衛協力が、前者と矛盾しないようにするバランス力もポーランドには求められる。

以上、ポーランドには、西側の前線化、ヨーロッパの重心化という現象、政治的思惑を超えた役割を期待する考えがあることを紹介して来た。ポーランドがどのような役割を果たすかはポーランド国民の意思次第だが、今後しばらくは、最も重要なヨーロッパの一国であり、西側が凝視し続ける国となることは間違いないだろう。それは、同じように帝国思考を有する巨大な隣国と西側の最前線で向きあっている日本のモデルにもなるかもしれない。

“Central and Eastern Europe (CEE) as a New Centre of Gravity: Recommendation on Strengthening Regional, European and Transatlantic Security,” WARSAW SECURITY FORUM ANNUAL REPORT 2023, Warsaw, Security Forum, 2023.

“Re-writing Cultural Geography: Toward a New Meaning of Eastern Europe,” December 8-10 2023, Faculty of Philosophy, University of Warsaw.

網谷龍介・伊藤武・成廣孝編『ヨーロッパのデモクラシー』改訂第二版、ナカニシヤ出版、2014年

松尾秀哉他編『教養としてのヨーロッパ政治』(ミネルヴァ書房、2019年)
Larry Wolff, “Inventing Eastern Europe: The Map of Civilization on the
Mind of the Enlightenment,” Stanford University Press, 1994
ミラン・クンデラ(里見達郎訳)『誘拐された西欧——あるいは中央ヨーロッパの悲劇』『ユリイカ』
23-2、1991年
板橋拓己『中欧の模索』創文社、2010年
小泉悠『「帝国」ロシアの地政学』東京堂出版、2019年
Dennis P. Hupchick, Harold E. Cox ed.,” The Palgrave concise historical
atlas of Eastern Europe,” Palgrave,2001
小森田秋夫「スモレンスクの惨事」『神奈川大学法学研究所 News Letter』No.15,
March,2011.
小森田秋夫「『連帯』の国、カトリックの国、EUのなかの『中国』—ポーランドの逆説」羽場久美
子編『EU(欧州連合)を知るための63章』明石書店、2013年

なお、本稿執筆時にウクライナの EU(NATO ではない)への加盟交渉が合意されたとのニュースが入った(2023年12月14日)。ハンガリーは採決時に欠席したとの事である。実現すれば、ウクライナはここにあるように、胸を張って「ヨーロッパ」の仲間入りができるだろう。それは、ウクライナの安心感を少しは向上させるだろう。

また、小森田秋夫氏には「中国」(ちゅうこく)概念について詳しくご教示いただいた。記して感謝申し上げます。